

～『冬のオペラ』例会～

——前説—— 著者略歴～『冬のオペラ』に至るまでの年表～

北村 薫（きたむら かおる）

1949年12月28日埼玉県北葛飾郡に生まれる。中学時代は科学部、美術部、新聞部に在籍。

日本の本格ミステリーとの初めての出会いは鮎川哲也の『達也が嗤う』だそう。

1964年県立春日部高校に進学。演劇部に所属。部活では役者と脚本を兼任しつつ、落語やミステリーに傾倒したという。因みに後に国語教師となった時も演劇部顧問を兼任している。

1967年早稲田大学第一文学部に進学。ワセダ・ミステリ・クラブに入る。卒論は『六の宮の姫君』のテーマにもなった芥川龍之介と菊池寛。

1971年埼玉の県立高校の教師となる。

1989年3月デビュー作『空飛ぶ馬』（鮎川哲也と十三の謎シリーズ）刊行。当初は覆面作家として素性を隠していた。

1990年1月『夜の蟬』刊行。

1991年2月『秋の花』刊行。

同年4月、『夜の蟬』で第44回日本推理作家協会賞（および連作集部門）を受賞。これを機に素性を明らかにする。

同年11月『覆面作家は二人いる』刊行。

1992年4月『六の宮の姫君』刊行。

1993年9月『冬のオペラ』刊行。この頃から専業作家となる。

——前奏—— 探偵の歴史

近代に移り宗教（迷信）が廃れ科学（知識）が台頭。

様々な物事がルールによって定義され始めた。

誰も居ないのに屋根が軋むのは家鳴り。

死んでもラッパを離さないのは死後硬直。

水の上で紙が燃えるのは化学反応。

——第一幕—— 「三角の水」

- ・「名」探偵事務所
- ・事件の解決と依頼人の反応
- ・姫宮あゆみの記述者としての心がけ

——間奏—— 名探偵の条件

探偵とは推理する人であると同時に事実を蒐集する人。

世界の二重構造 表面／深さ

「データベースは答えを出せない」

膨大な知識量と卓抜な才気が結びついて初めて機能する。

——第二幕——「蘭と韋駄天」

- ・犯人＝足疾鬼 探偵＝韋駄天
- ・表慶館とニコライ堂
- ・名探偵の理解者

——第三幕——「冬のオペラ」

- ・ダイイングメッセージ
- ・密室の理由
- ・理想と現実の果てに

——終幕——「名探偵である」という事～巫弓彦の生き方～

巫は自分の感情以上に「名探偵である」という事実の重きを置いている。この事実は彼の信念、こうあるべきという理想像とも言えるだろう。彼は自らの理想を貫き通し遂には現実に打ち勝った。しかし、その結果、理解者（ベターハーフ）となれるはずであった人を犯人として指摘する事になってしまった。ここで注目したいのは「記述者は理解者に成り得ない」という事。記述者はあくまで探偵に一番近い「一般人」でなければならない。

——カーテンコール—— 名探偵と記述者のその後

- ・乾杯の歌
- ・『ビスケット』

参考文献

『探偵小説の社会学』内田隆三 2001年1月18日第一刷発行 岩波書店

『静かなる謎 北村薫』蓮見清一 2004年6月25日発行 宝島社